連載：現代管情報シリーズ

TUNG-SOL KT-66

都来往人

はじめに

米国の真空管メーカーとして知られるTUNG-SOL（Tung-Sol Lamp Works Inc.）は，軍用や工業用の高信頼管を得意とし，5881や6550などの画期的な優れた新型管を開発する一方で，12 AX 7や6 SN 7，6 V 6 GT等の民生用途管も多数製造し，その優れた品質や音質には今なお定評があります．

やがて半導体が電子機器の主流になると，Tung-Solは1970年代後半には真空管の製造から撤退し，その後，会社も解散した模様ですが，去年から今年にかけてTung-Solブランドの新型管が米国で次々と発表されています．

実はこれらはTung-Solブランドの現在のオーナーである米国のNew Sensor社（Sovtek球やElectro-Harmonix球のサプライヤーとして有名）がロシアのReflector社に新たに造らせたものです．

本シリーズでは，これまでに米国発ロシア生まれTung-Solブランドの各復刻版（6550や12 AX 7，6 V 6 GT）をご紹介してきましたが，今年の2月中旬頃になって，今度はKT 66が発表されました．

Tung-Sol KT 66は，2月末頃に米国で発売された模様で，わが国にはようやく6月下旬頃になって上陸しました．

もともとTung-SolではKT 66は製造していなかったので，今回発表されたロシア生まれのKT 66とは如何なる球なのか？　とても気になります．

今回はサンプルが入手できましたので，さっそくご紹介したいと思います．

KT 66について

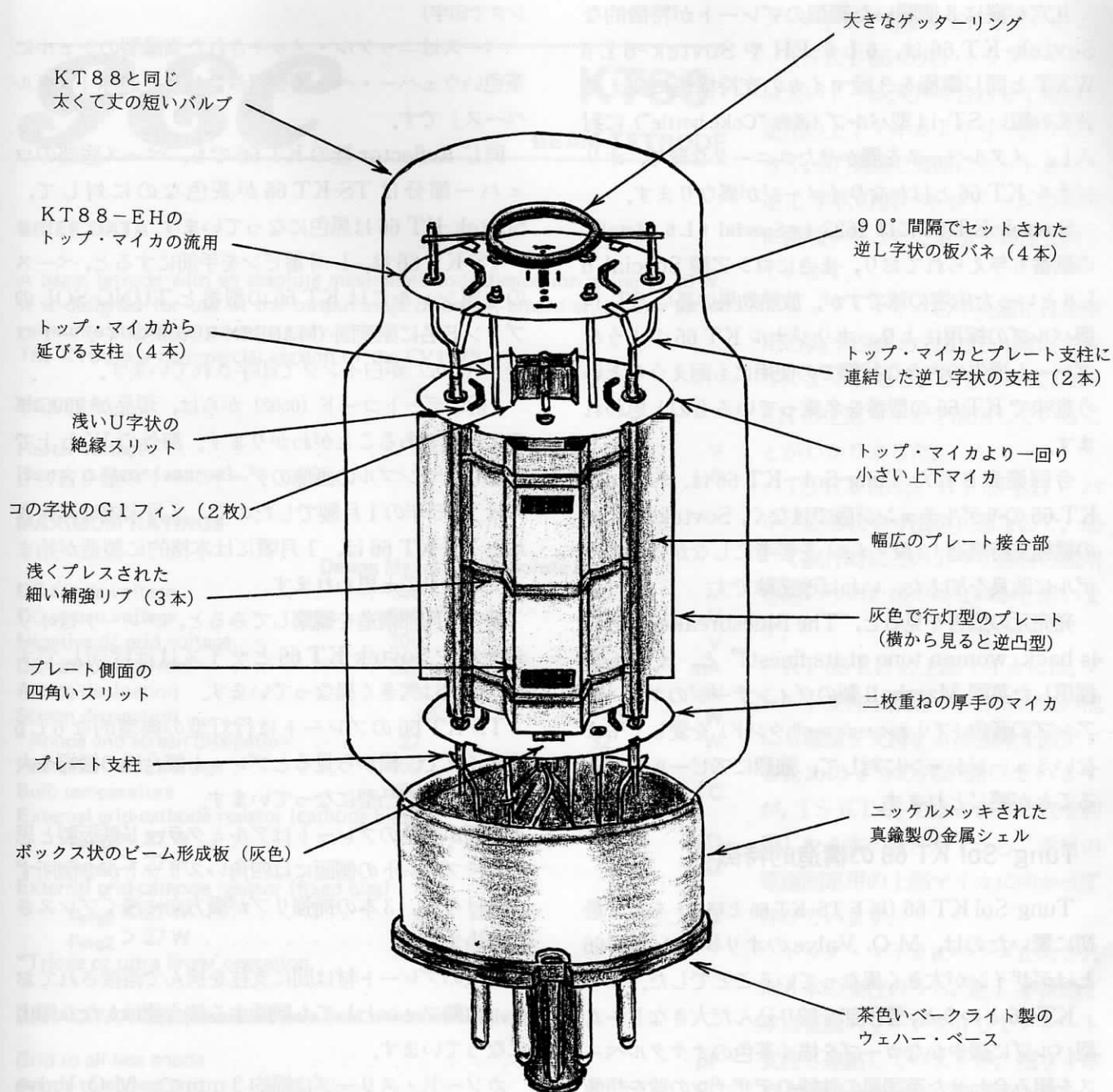
1936年にRCAが開発した6 L 6が米国のビーム出力管の代表選手ならば，翌1937年にM-O（＝Marconi-Osram）Valveが開発したKT 66は英国を代表するビーム出力管です．

KT 66はウィリアムソン・アンプやQUAD-IIの出力管として有名ですが，これら英国生まれのオーディオ・アンプにとどまらず，ギター・アンプの出力管としても採用されていました．

有名なところでは，英国のMarshallのJTM 45やモデル1962（通称：ブルースブレイカー・コンボ）などの出力管として採用されています．

余談になりますが，これらMarshallのギター・アンプは，英国3大ギタリストの一人であるエリック・クラプトンが愛用していたことで知られています．

特にJTM 45（KT 66 PP出力段）をベースに，トレモロ・エフェクトをON/OFFできるフット・スイッチを備えたモデル1962は，出力45 Wとは思えない音圧と存在感を有し，エリック・クラプトンがブルースブレイカーズ時代の有名なアルバムのレコーディングに使用したことから「ブルースブレイカー・コンボ（Bluesbreaker Combo）」というニックネームで呼ばれるようになった，その道では不動の人気を誇る有名なモデルです．

その人気ゆえに，1997年にはJTM 45やブルースブレイカー・コンボの復刻版が製造されましたが，何とこれらMarshallのギター・アンプの復刻版には，同年に英国PM-ComponentsによるGolren

● TUNG-SOL KT-66の構造的特徴

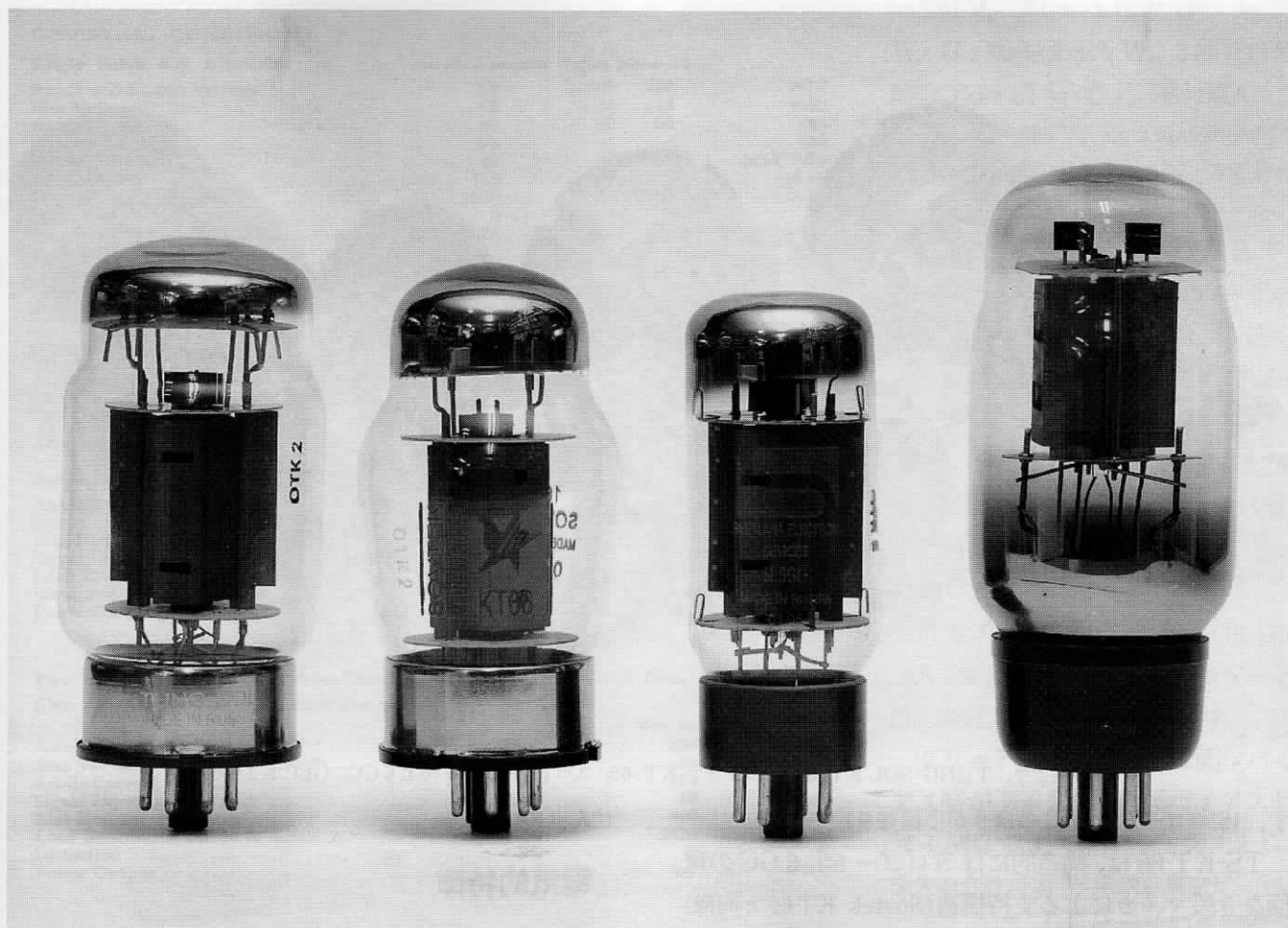
Dragonブランドから発売された中国製のKT 66が採用されています．

外観や内部構造（ビーム形成板を除く）に至るまでM-O Valveオリジナルを徹底的にコピーした中国製KT 66は，KT 66系の現代管では初めて容姿や音質までオリジナルを強く意識して開発された意欲的なモデルですが，開発の強い動機付けとなったのは，QUAD-IIへの差し替え需要よりもむしろこのMarshallの往年の銘機の復刻計画やMarshall自身のオリジナルへの頑固なまでのこだわりがあったからだと思われます．

オリジナルKT 66は英国でのみ製造された球ですが，米国では7581 Aが相当管として指定されています．

GE製の7581 AにはKT 66の副番が与えられているものもありますが，その7581 Aも入手困難になりました．

そのような背景もあって，中国製やロシア製のKT 66は90年代後半に次々と発表されたのではないかと思います．

ところで，ロシア製のKT 66は今回発表されたTung-Sol KT 66が初めてではなく，99年に同じメーカー（Reflector社）からSovtek-KT 66が発表されています．

● TUNG-SOL KT-66　●ソブテック KT-66　●スベトラーナ SV-6 L 6 GC　● GEC KT-66

●各社の KT-66 の外観を比較する

一方，販売会社を失ったロシアの Svetlana 工場は，事業の提携先を英国の PM-Components 社（Golden-Dragon ブランドで有名）に切り替え，2003 年以降，同工場の記号の「C ロゴ（Winged-C）」を新たなトレードマークとする新生 Svetlana（SED）に生まれ変わりました．

これが Svetlana という同じブランド名の同じ型番であるにもかかわらず，2つの異なるモデルが存在するようになった理由です．

ちなみに海外では，C ロゴを展開している英国 PM-Components による Svetlana-St. Petersburg の製品を SED，S ロゴを展開している米国 New Sensor による Reflector の製品を Svetlana と区別するのが一般的となっています．

S ロゴ（Svetlana）と C ロゴ（SED）の 2 つの 6 L 6 GC を比較すると，厚手のガラスを用いた重量感のある中太バルブや茶色のベース，放熱翼を大きくとった行灯型の電極，二枚重ねの厚手の上下マイカ，板バネによる電極の支持という基本的な特徴は共通していますが，詳細に観察するといくつかの違いがあります．

まず，SED-6 L 6 GC（元来の Svetlana の製品）は，上部マイカにセットされた 4 本の逆 L 字状の板バネで電極を支持していますが，S ロゴ-6 L 6 GC（Reflector 製の同等製品）は上下マイカにセットされた 8 本の逆 J 字状の板バネで電極を支持して耐震性をさらに強化している点が異なります．

また，ベースも SED のほうが S ロゴ製品よりも一回り太く，底部のモールドの形状も異なります．

さらに，上下マイカのプレート支柱付近に設けられた絶縁用スリットの形や G 1 フィンの材料も異なり，プレートのデザインも側面に設けられた 2 つの細長いスリットの位置や大きさ，それにプレート表面にプレスされた 3 本の補強リブの太さも微妙に異なります．

さて，話を元に戻して，観察の結果，TS-KT 66 の電極や各部材の構造・形状は，プレートのデザインのわずかな違いを除いては，S ロゴ－6 L 6 GC とほぼ共通していることが確認できました．

両者を比較してみると，プレートの寸法や形状は同じですが，側面に設けられた 2 つの細長いスリットの位置が微妙に異なるといったユニークな特徴がありま

できませんが，TS-KT 66 はＳロゴの Svetlana-6 L 6 GC をベースにした改造球である可能性が非常に高いと思います．

まとめ

英国生まれの M-O Valve オリジナルの KT 66 は，海外を含めて真空管ファンの間では，現在でも音質面で非常に高く評価されています．

とくに英国 Marshall の銘機と呼ばれる Bluesbreaker Combo や JTM 45 といったギター・アンプを愛用する世界中のミュージシャンの間では，オリジナル独特の英国風サウンドを実現するうえで KT 66 は不可欠なアイテムとなっていますが，現在ではオリジナル品は稀少かつ非常に高価な球となっており，さらに相当管の米国製 7581 A も枯渇してきたことから，クォリティの高い復刻版の登場が望まれていました．

97 年に英国の PM-Components による Golden-Dragon ブランドから発売された中国製の KT 66 の復刻品は，同年に復刻された Marshall の銘機の出力管として採用されていることから，まさにそのようなニーズに応えるために企画されたモデルとも言えます．

現在，一般的に入手可能な現代管の KT 66 としては，90 年代末に発表された中国の曙光電子の製品やロシア製の Sovtek-KT 66 がありますが，今回発表された TS-KT 66 がさらに加わったことでさらに選択肢が広がりました．

肝心の TS-KT 66 の音質については，我が家のシングル・アンプで試聴したところでは，透明感があり，中域は充実していて温かみがあり，ヴォーカルは艶めかしく聞こえます．また，豊かでしっかりした低音が特徴で，高域も素直に伸びていてバランスもよく，全体的に良好です．

オリジナル KT 66 は音の輪郭がきっちりと表現され，透明感や温かく滑らかな中低域と音のバランスなどの点でさすが！　と思わせるような特徴を持っていますが，TS-KT 66 はこれに迫るものが感じられ，音質的にもオリジナルをかなり意識してつくられていることが感じられました．

電極構造が酷似したＳロゴの Svetlana-6 L 6 GC との比較では，透明感があり，バランスもよく，低域がしっかりしているという点ではお互いの音質的な傾向は共通していますが，TS-KT 66 ではさらに中音域が充実し，音楽性や表現力の豊かさといったニュアンスが増したような印象を持ちました．

Ep＝250 V　Eg 2＝250 V　Eg 1＝－15 V

	Ip	Ig 2
KT 66 オリジナル規格	85 mA	6.8 mA
TS-KT 66 サンプル 1	76 mA	4.7 mA
サンプル 2	76 mA	5.0 mA
サンプル 3	77 mA	5.4 mA
サンプル 4	79 mA	5.4 mA
サンプル 5	79 mA	5.4 mA
サンプル 6	79 mA	5.8 mA
サンプル 7	66 mA	4.9 mA
サンプル 8	67 mA	4.6 mA
サンプル 9	75 mA	5.6 mA
サンプル 10	76 mA	6.2 mA
サンプル平均	75 mA	5.3 mA

〈第 4 表〉Tung-Sol KT 66 の測定結果

TS-KT 66 は，外観的には KT 66 よりも KT 88 に近く，オリジナルとはイメージがかけ離れていますが，音質的にはオリジナルをかなり意識してつくられたユニークな新製品です．日本に上陸してまだ日が浅いためなのか，雑誌の通販の広告ではまだ見かけませんが，秋葉原の一部のショップには入荷しています．

さて，今回ご紹介した TS-KT 66 をはじめ，米国発ロシア製の復刻版 Tung-Sol の新型管は，全てが Reflector 社製の既存モデルを原型とする，いわば改造品種ではありますが，そのいずれもが原型とは音質的な傾向や特徴が異なり，音楽性や表現力の豊かさといったニュアンスが原型よりも増しているように感じました．

音質的にも Tung-Sol マジックと言われるような何らかの検討と改良が加えられているのではないかと思われます．

米国では今もなお Tung-Sol ブランドは音質的にも品質的にも高く評価され，根強い人気がありますが，オリジナルはすでに市場から枯渇し，日増しに入手困難かつ高価になっています．

そのオリジナルを強く意識して生まれた現代版 Tung-Sol ブランドの各種モデルは手頃に入手可能な非常に魅力的な製品ではないかと思います．

米国からの情報によると，今年の夏には Tung-Sol 5881 の復刻版も発表される予定とのことです．Tung-Sol が「究極の信頼性を持つ 6 L 6」として開発した 5881 の復刻版とは如何なる球なのか？　今から興味津々といったところです．